

日本最初の本格的な水産学徒・内村鑑三

影山 昇 (東京水産大学教授)

日本の学問の発展に貢献したお雇い外国人教師たち

幕末から明治初年にかけて主に研究・教育機関や個人に雇われた西洋人を総称してお雇い外国人教師といいます。

特に明治政府では欧米先進諸国の科学知識や技術を早急に導入して日本の近代化をすすめるために、政治・法制・財政・産業・教育・文化・科学技術・医学等といった広い範囲にわたって、当時としては思い切った破格の経済的な待遇で数多くの外国人専門家を雇いました。

たまたま東京大学創立 120 周年記念展示ということで平成 9 年 10 月 16 日から 12 月 14 日まで、東京大学附属図書館で「お雇い外国人展」が開催され、東京大学のお雇い外国人教師に注目して、附属図書館所蔵の自筆資料や著作等により東京大学にどのような貢献をしたかを紹介しておりました。

主な人物としてはエルウィン・ベルツ、エドワード・S・モース、オスカル・ケルネル、バシル・H・チェンバレン、G・ボアソナード・フォンタラビー、ラフカディオ・ハーン等といった人々の資料が展示されておりました。

こうした折に「日本の魚学・水産学事始め—フランツ・ヒルゲンドルフ展」が県立生命の星・地球博物館で開催されるということで大いに期待しました。それというのも、「シュタインハイム淡水成石灰」の論文で学位を受け (1863 年)、ベルリン動物学博物館員・ハンブルク動物園長、ドレスデンのレオポルド・カロリン・ドイツ自然科学院図書館長を歴任した実績を評価して、日本政府が東京医学校予科で「数学・博物学・顕微鏡用法」を担当する外国人教師として任用した人物だったからです (任用期間は明治 6 年 3 月 1 日から同 9 年 7 月 10 日まで)。

ドイツ動物学の紹介に関しては米国人教師モースが東京大学で動物学を講義する前でもあり、研究者としても一頭地を抜いたお雇い外国人教師であったのに、日本では彼の名前はよ

く知られていない存在でしたから、隠れた先人を改めて紹介する企画はとても大切だと思ったからです。

ただ気になった一点は展示表題が「日本の魚学・水産学事始め」とある点でした。

特に日本の水産学の創始者としている点は実際に展示をみて、その検証のあり方に問題を感じたのでした。

日本の水産学の始まり

明治 9 年に開校された北海道大学の源流となる札幌農学校は W・S・クラーク教頭の名前で有名ですが、明治 11 年に同校に着任した当初、生理学・動物学・獣医学担当のジョン・C・カッターが、明治 13 年から本科第 3 年級の第 1 学期より動物学の講義 6 時間中の 3 時間を水産学に当てたことから、日本の水産学は始まったのです。

カッターの講義の内容を見ると、口述や実験・実習・文献使用による主要食用魚の生活史、食餌、経済的価値あるいは人工孵化、稚魚飼育、輸送、魚類の馴化といった諸問題にまで及んでおり、このカッターの水産学講義に接したことで後年にいたり、水産界で活躍する人材が数多く生まれました。

とにかく、それまでは水産に関してはこれを漁師の仕事であるといった認識にとどまり、水産学の研究や教育がまったく無視されたままの状態であったのですから、カッターによる日本最初の水産学講義の開始は、まことに意義深いものでした。

こうした史実のあることについては、今回のヒルゲンドルフ展の企画・推進に当たったヒルゲンドルフ展企画実行委員会に事前に指摘しておきました。しかしながら、実際の展示をみますと、明治 13 年にベルリンで行われた万国漁業博覧会のために渡欧した松原新之助 (東京医学校での教え子) をヒルゲンドルフが助けて、水産動物 (海綿・サンゴ・貝類・甲殻類・水鳥・魚類等) や漁業道具、水産物模型、水産物運送道具等を出品、あわせて出品した展示物のカタログ作成にも



内村鑑三、明治 20 年ニューヨークで撮影、『内村鑑三全集 2』岩波書店。

ヒルゲンドルフが松原を援助したという指摘を踏まえ、松原新之助が帰国後、オピニオンリーダーとなって大日本水産会を結成し、現在の東京水産大学の前身となる水産講習所を村田保と協力しながら設立し、ついで明治 36 年には官立に移管した水産講習所の初代所長になったということで、ヒルゲンドルフこそ日本の水産学の創始者であるといった結論を導き出し、今回の展示テーマの「日本の水産学事始め」に結びつけておりました。

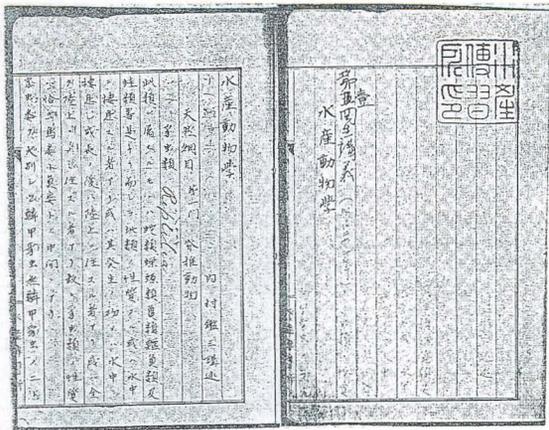
せっかく知られざるお雇い外国人教師ヒルゲンドルフを顕彰する企画であっただけに、まことに残念で、いまま少し慎重さと人物にふさわしい展示テーマを打ち出して欲しかったと思います。

本格的な水産学徒・内村鑑三

内村鑑三 (1861~1930) といえば日本のキリスト教界を代表する人物で無教会主義の創始者として知られています。

この名高い内村が日本の水産学の草分けだったと聞けば、驚く人が多いでしょう。

私は 13 年前、東京水産大学の『百年史』を執筆するため大学図書館で資料を探していたところ、『水産動物学』という筆書きの原稿を偶然見つけました。受講者の手になる内村鑑三の講義記録です。内村と水産学という意外



内村鑑三講述『水産動物学』の表紙と最初のページ。

な取りかわせに、思わず「へえ」と声をあげました。

これをきっかけに水産学徒・内村の本格的な研究を始めました。

内村は札幌農学校第2期生徒で、当時のお雇い外国人教師カッター（任用期間は明治11年9月7日から同20年1月20日まで）の水産学講義を受講し、在学中水産学研究を志します。卒業後は開拓使や札幌県の調査研究員になり、北海道内を精力的に歩き回って水産に関わる調査研究に打ち込んでいます。

内村の一連の調査研究の成果は、その結成にも馳せ参じた、大日本水産会の機関紙『大日本水産会報告』（明治15年4月創刊）の第1号から第37号（明治18年4月）までに、「千歳川鮭魚減少の源因」（第1号）・「北海道鱈漁業の景況」（第4号）・「鱈ノ発生」（第21号）・「漁業ト気象学ノ関係」（第21

22号）・「石狩川鮭魚減少の源因」（第26号）・「鮭魚に関する調査の成績」（第27・30～33号）・「漁業ト鉄道ノ関係」（第28号）・「瑞典国鮭魚絶滅の原因」（第37号）といった論文を発表しています。

その後、内村は明治17年、神学と理学の勉強のために米国に留学。帰国後の明治22年3月から翌

23年8月まで大日本水産会水産伝習所で水産動物学を教えています。

これまでの内村研究は、水産教育者としての側面を、単に生活だけのためだったと片付けているのが大半ですが、大きな誤解です。「水産動物学」の講義記録を見ても、彼がいかに入念に講義の準備をしていたかがわかりますし、房州への実地演習指導にも積極的に参加したことも記録に残っています。

晩年の日記にも故郷の河川の魚を「我が少時の友」と記すほど魚類を愛し、札幌農学校の卒業演説で水産学の学問的自立を主張し、水産学徒として生きんとした心情は、内村の中に強くあったのです。

内村水産学は、北海道時代の体験を下敷きに、欧米先進諸国の研究成果を広く涉猟し、水産資源の保護や環境保全についても活発に発言しているの

が特色です。

水産伝習所は明治30年に私立から官立に移管され水産講習所と校名を改称されました。

内村鑑三は、それまで未開拓であった日本の水産教育を切り開き、水産学研究の可能性に挑んだ本格的なわが国最初の水産学徒であったのです。

内村という若い青春のすべてを完全燃焼させた先覚の情熱と業績に、21世紀を見据えて大きな問題に直面している現代日本の漁業が学び取れるものはとても多いものがある、と私は考えています。

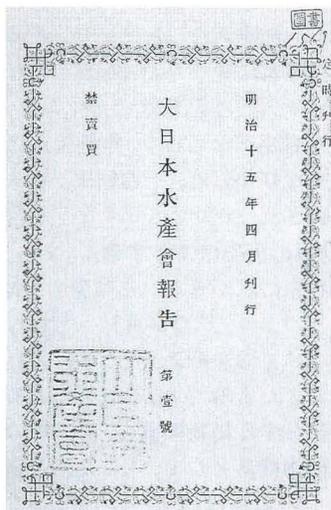
なお日本の魚類研究については天明2年（1782）、日本列島周辺の魚が学名をオランダのハウタインによって与えられヨーロッパに紹介されたのが最初で、20世紀のはじめ米国のジョルダンとその弟子たちが精力的にそれまでの120年間に及ぶ日本の魚類研究をまとめ、かつ新しく発見された種を加え、日本の魚類相の全体像を描き出しています。

今回の展示では、ヒルゲンドルフとジョルダンやその弟子たちの仕事との間にどのような関連があるのかといった検証がありませんでした。

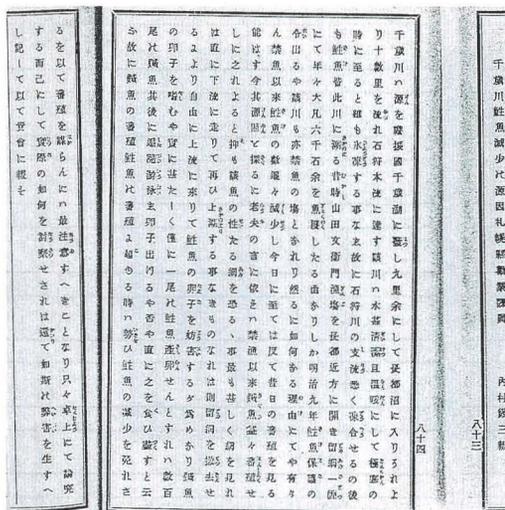
ちなみに、その後は日本の魚類学者の努力で新しい種が相次ぎ加えられ、現在では実に3,600以上の種が確かめられております。

参考文献・資料

ヒルゲンドルフ展企画実行委員会編・刊『日本の魚学・水産学事始め—フランツ・ヒルゲンドルフ展』（平成9年）
 上野益三「ヒルゲンドルフ」（日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版・昭和59年）
 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史・通史一』（東京大学・昭和59年）
 北大水産学部七十五年史出版専門委員会編『北大水産学部七十五年史』（北海道大学水産学部・昭和63年）
 北海道大学『北大百年史（部局史）』（ぎょうせい・昭和55年）
 札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫19・お雇い外国人』（北海道新聞社・昭和56年）
 『大日本水産会報告・第1号～第37号』（大日本水産会・明治15年4月～同18年4月）
 影山昇『人物による水産教育の歩み—内村鑑三・寺田寅彦・田内森三郎・山本祥吉・天野慶之』（成山堂書店・平成8年）
 中坊徹次『普通の魚の学名が変わる』（『産経・夕刊』平成10年3月28日付）



『大日本水産会報告』創刊号表紙。



創刊号掲載・内村鑑三論文（83-85ページ）。